

ニュース JAFIC EYE No.125

八戸での水産関係者との意見交換会

1 はじめに

平成 30 年（2018 年）12 月 20 日に八戸市で水産関係者 104 名が参加して意見交換会「スルメイカ冬季発生系群の資源状態と漁況予報をめぐって」（表 1）が開催された。冒頭で、スルメイカを取り巻く情勢として、漁獲の減少と価格が高騰する中で、イカ加工の国際原料であるアメリカオオアカイカをめぐり中国のイカ釣操業が IUU 問題を伴いながら日本のイカ市場にも影響を与える可能性が指摘された。このような厳しい背景のもと、①今年の資源状態と漁業の状況、②青森県のスルメイカ漁海況、③岩手県のスルメイカ漁海況、④資源減少の要因、等について各機関からの報告を元に意見交換が行われた。

2 2018 年度スルメイカ冬季発生系群の資源状況について

2015 年以降資源量は減少に転じており、2016 年以降の資源量は低位水準にあると判断された。スルメイカ冬季発生系群の主産卵場である東シナ海では、2015、2016 年の水温環境が卵稚仔の生残にとって不適であったことから、2015 年以降の資源量は大きく減少したと考えられた。また、2017 年の水温環境は平均的で同年の資源量はほぼ横ばいで推移したが、2018 年の水温環境は再び不適となり、その結果、2018 年の資源量は更に減少したと見られる。2018 年漁期終了時の親魚量は、回復措置が必要になる親魚量の水準を下回ると判断された。

3 太平洋における 2018 年のスルメイカ漁海況

調査船による漁場一斉調査結果に基づく①スルメイカの分布密度（≒資源状態）、②海洋環境、及び③直近の漁況経過の情報から、本年は漁期前・後半とも津軽海峡～道南太平洋以南では前年並、常磐～三陸海域では前年を下回ると予報した。2015 年以降、スルメイカ冬季発生系群の資源量は顕著な減少傾向を示し、各地の漁況に大きな影響を与えた。青森県白糠以南～宮城県での 1 隻 1 日当たりの漁獲量は前年並であったが、水揚げ量および水揚

表 1 意見交換会プログラム

●話題提供・意見交換

主旨説明 スルメイカをめぐる関連イカ漁業の現況：酒井光夫（JAFIC）

1. 2018 年度スルメイカ冬季発生系群の資源状況について：加賀敏樹（水産研究・教育機構 北海道区水産研究所）
2. 太平洋における 2018 年のスルメイカ漁海況：岡本俊（水産研究・教育機構 北海道区水産研究所）
3. 2018 年漁期青森県スルメイカ漁況：今村 豊（青森県産業技術センター 水産総合研究所）
4. 2018 年漁期岩手県スルメイカ漁況：高梨愛梨（岩手県水産技術センター）

●全体意見交換 司会：酒井光夫（JAFIC）

隻数は前年を下回った。一方で、津軽海峡～道南太平洋では、1 隻 1 日当たりの漁獲量、水揚げ量および水揚隻数も前年並であった。前年は北海道沿岸域においてスルメイカの北上来遊を妨げる低水温の水塊が分布していたが、本年はそれが解消されたことで浦河の沿岸域に漁場が形成されたと考えられた。

4 2018 年漁期青森県スルメイカ漁況

青森県における 2018 年の小型いか釣り漁業による 5～11 月の漁獲量は 765 トン、前年比 46%と減少し 1977 年以降過去最低となった。CPUE（一隻当たりの漁獲量）は 179 kg/隻数で前年比 76%となり、漁模様の悪かった 1980 年代並みの水準であった。海域別では、日本海沖合域、沿岸域共に本州沿岸域でのスルメイカ分布密度が低かったことから、青森県沿岸域でほとんど漁場が形成されず低調に推移した。津軽海峡については、日本海からの来遊量が少なかったことから低調に推移した。太平洋については、7 月以降、津軽暖流の渦モードが強く、沿岸域の水温が高めに推移し漁場が形成されにくい海洋環境に加え、冬季発生系群の資源量が低位で来遊量が少なかったことなどから、低調に推移したと考えられた。

5 2018 年漁期岩手県スルメイカ漁況

本県海域の 2018 年漁期の状況は、11 月中旬までの漁獲量は 2,288 トン、前年同期比 76.7%となり 1990 年以降最低であった。漁獲量を旬別にみると、5 月上旬～8 月中旬まで前年を下回る極めて低い水準で推移し、9 月上旬にはトロールの漁獲が急増した。しかし、その後、9 月下旬に急減し、以降トロールを中心に概ね前年並みの水準で低調に推移した。8 月中旬までの漁獲が極めて低調となった要因は、冬季発生系群の資源量減少に伴う来遊量減少に加え、本県海域での北上暖水が強まり沿岸域に水温フロントが形成されず、魚群が沖合域に分散し易い海況条件となったためと見られた。一方、8 月下旬～9 月中旬に一時的に漁況が好転したのは、親潮系冷水の勢力が強かったことに加え、県南部～県中部海域に暖水が波及して主要漁場にかけて顕著な水温フロントが形成され、魚群が沿岸域に蟄集し易い海況条件となったためと考えられた。

6 全体的意見交換

総合討論講では講演全体を通して関心の高かった 3 課題、1) 日本海の外国船情報、2) 資源回復の可能性、3) 国際的な資源管理・外国との協力の可能性、について意見交換を行われ、以下に要約された。

- 1) 最新の北朝鮮船の情報、北朝鮮の違反操業に関連した韓国情報の追加報告が全国いか釣り漁業協会の川口会長からあった。また、日水研の久保田氏より、冬季発生系群に関しては外国の漁獲圧は低いと考えられるが、秋季発生群では外国船の影響も考慮が必要との見解が示された。
- 2) 現状は以前の寒冷レジームと異なっているものの日本周辺の水温低下が見られる。過去の周期から考えると 10 年ほどで変動しており、短期での回復は厳しいと思われる。
- 3) 韓国とは情報交換をしているが、国際管理となると現状では難しいと思われる。

その他、漁業者からは資源が低下している中での外国船も含む漁獲の影響について、突っ込んだ説明がほしいという意見が多かった。また、スルメイカ資源が低い状況でローカル群の漁獲が目立つことから、それらを漁獲することによる資源への影響を危惧する意見も出た。スルメイカ資源の低下と漁獲量が減少する中で、操業を巡って漁業者からの意見がますます厳しくなってくると思われる。

（酒井光夫）